



川上直哉 [著]

FEBC 放送で、好評を博した 3.11 以降の宣教論！！

私の救い、私たちの希望

ボッシュ『宣教のパラダイム転換』を被災の地で読む

8月20日刊行予定

牧師カワカミ・ナオヤ、 現場から神学する！

「選択を迫り、その結果次第で、その人との関係を切るかもしれない」という「今までの伝道・宣教」とは違う何かを探さなければ。「人数が少ないこと」が問題なのか。むしろ「人数を求めること」が問題なのではないか。

主な目次

私の救い、私たちの希望 (第1回)
宮城石巻読書の集い
パラダイムを貫く共振

私の救い、私たちの希望 (第2回)
宮城石巻読書の集い
教会の外にいる人の言葉で、
福音を語りなおす

私の救い、私たちの希望 (第3回)
宮城石巻読書の集い
「神は、偏在する」。
東北で聖書を読むことの意味

私の救い、私たちの希望 (第4回)
宮城石巻読書の集い
なぜ私たちは宣教するのか、
礼拝に生きるのか

私の救い、私たちの希望 (第5回)
宮城石巻読書の集い
東北キリシタンの成功
そして消滅の姿から

私の救い、私たちの希望 (第6回)
宮城石巻読書の集い
現場から聖書を読み、宣教を見つめる。

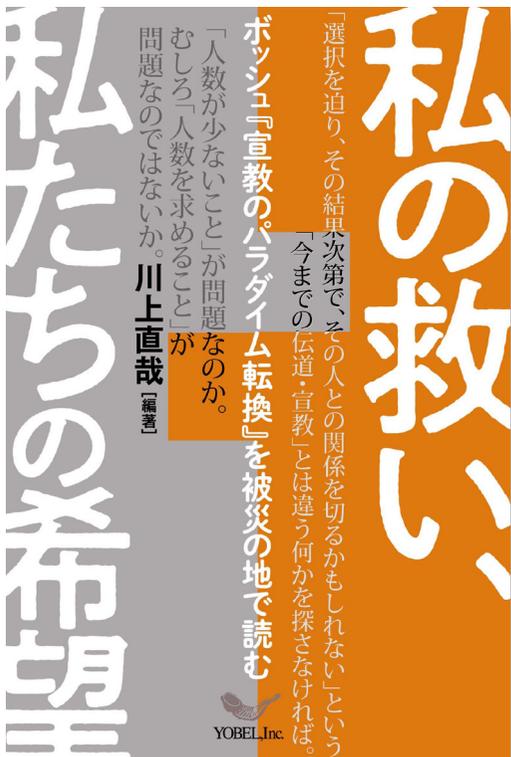
「東北ヘルプ」掲載記事から
釜石から——「街の牧師」として：
高橋夫妻インタビュー

「東北ヘルプ」掲載記事から
「街の牧師」の可能性
——釜石と熊本から

【書評再録】
P・T・フォーサイス 川上直哉 [訳著]
活けるキリスト
——『活けるキリスト』の現代的意味
不器用な人びと 大頭眞一氏

川上直哉 (かわかみ・なおや) 1973年、北海道に牧師の息子として生まれる。神学博士(立教大学)・牧師(日本基督教団正教師)。宮城刑務所教誨師、宮城県宗教法法人連絡協議会常任幹事、仙台白百合カトリック研究所客員研究員、東北学院大学非常勤講師、仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク(NPO法人「東北ヘルプ」)代表、食品放射能計測プロジェクト運営委員長、世界食料デー仙台大会実行委員長。2018年4月～日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師。(2024年7月31日現在)

主な著訳書『日本におけるフォーサイス受容の研究：神学の現代的課題の探究』(キリスト新聞社、2012)、『食卓から考える放射能のこと』(共著・いのちのことば社、2013)、『被災者支援と教会のミニストリー』(共著・いのちのことば社、2014)、『被ばく地フクシマに立って——現場から、世界から』(ヨベル、2015)、『ポスト・フクシマの神学とフォーサイスの贖罪論』(新教出版社、2015)、『震災と市民2支援とケア』(共著・東京大学出版会、2015)、『東日本大震災と〈復興〉の生活記録』(共著・六花出版、2017)、『被災後の日常から——歳時記で綴るメッセージ』(ヨベル、2018)、『東日本大震災と〈自立・支援〉の生活記録』(共著・六花出版、2020)、フォーサイス『聖なる父——コロナ時代の死と葬儀』(ヨベル、2020)、フォーサイス『活けるキリスト——「活けるキリスト」の現代的意味』(ヨベル、2022)、『東北キリシタン探訪』(共著・教友社、2024)



四六判並製・264頁・定価1,980円

本体1,800円+税 ISBN978-4-911054-33-8 C0016

はじめに

キリスト聖協団仙台宣教センター 宣教師 中澤竜生

1 「教会」から集会所などの活動拠点へ

東日本大震災において、クリスチャンは多くの支援活動を行いました。その結果、地方に住む多くの人びとが、今まで知らなかった「クリスチャン」を身近に感じるようになったと言われます。それは素晴らしいことでした。しかし、一部では伝道と支援物資をセットで提供するなどして、地域住民の間から反発を買ってしまうケースもありました。

私は宮城県南三陸町を中心に支援活動をしていました。支援には様々な教団・教派の方々が参加しており、今までに出会った事がない多くの方との付き合いが生まれました。中でも信仰者が持つ理念と特徴は、一般の支援者とは異なっていました。それで、被災者から、その支援活動について、良い報告も、そして悪い報告・クレームも、多く受けたのです。一番のクレームは伝道の仕方についてのものです。特に「生き方を否定するような言葉」や「上から目線で語られること」に対する苦情がありました。私はいつしか、南三陸町の地域で、宗教問題を扱う窓口となっていました。それで、宗

はじめに

教者による支援活動について考える日々が続きました。

幸いなことに、南三陸町に集まったクリスチャンたちの多くは、この地での宣教活動に必要なことを十分に理解しているようでした。つまり、従来の伝道方法では大切な福音を伝えることができないということでした。口で伝えるよりも、まず私たち自身が良い働きを実践し信頼を築き、真心を込めて証あかしをすることが重要です。また、地域に貢献しつつクリスチャンの考え方や生活リズムを知ってもらう。そうした双方の思いやりの関係が必要です。

南三陸町には震災前から「教会」と呼ばれるべき建物はありませんでした。それで私は、教会を拠点とした活動ではなく、避難所や仮設住宅に設置された集会所などを主な活動拠点とすることから始めました。その結果、地域に密着した良い活動を行うことができたのだと思います。このことが、地域住民からの高い評価を頂く結果につながったと考えられます。

東日本大震災の被災地となった太平洋沿岸部における復興スローガンとして「心の復興」が掲げられていました。私たちも目指すスローガンは、まさにこの「心の復興」です。この点で、私たちと地域は一致できました。ただし、私たちの「心の復興」は「心を神様のもとに繋げる働き」だと思っています。それはつまり「御国に繋がること・天国へと導くこと」だと考えています。このスローガンは、地域の方々にも理解いただけるものでした。それで、私たちは地域の方と、生涯を通じて深まっ
て行くような関係を築き、そして社会全体が掲げる「心の復興」と重ね合わせた活動を続けているの

です。

2 「宣教」から「宣証」へ

地域に密着した活動と並んで、クリスチャン同士の一致と協働も重要です。

被災地は、少子高齢過疎の現場です。そうした地域に密着し、被災者と長い交流を続けて行きますと、その被災者の家族や親戚、友人などとも、緊密な関係が生まれてきます。すると、そうした誰かに現地で活動している「他のクリスチャン」が繋がっている、という場合が、多くあるのです。あるいは、おひとりの被災者が「複数のクリスチャンたち」とつながっておられることもあります。

つまり、そうした地域の方々から、私たちクリスチャンは、見られています。仲たがいをしているのか、仲良く力を合わせているのか。そのことを通して、私たちの信用が失墜したり、あるいは信用してもらえたりするのです。

ですから私たちは、それぞれの活動を通じて得られた情報を共有する必要を覚えました。被災者お一人おひとりにとっては、支援してくれる方々は皆、大切です。それなのに、私たち支援者が「私が・私が」と頑張ってしまったって、他の支援者を押しつけるようなことがあっては、やはり、好ましくないのです。

被災者に気を遣わせないためにも、私たちが協働している姿を見せることが重要です。この姿勢も

はじめに

「証^{あかし}」となるはずです。私たちクリスチャンの間の関係の中に、具体的に天国を見せることが何より重要だと考えました。

以上の事柄を踏まえて、私たちは「実践宣証会議」という集まりを始めました。「宣教」ではなく「宣証」という言葉を作り、掲げてみました。それは「宣教」という言葉を現場から考え直してみようという思いがあつてのことです。

この「実践宣証会議」を、私たちは2014年の夏から登米市で開催しています。「ひとりの人をみんなで天国に」というスローガンを掲げて情報を共有しているのです。このスローガンで語られる「ひとりの人」とは被災者・地域の方々のことです。そして「みんな」とは、寄り添う私たちクリスチャンのことです。

3 南三陸クリスチャンセンター愛・信望館 設立とその変化

先にも紹介しましたが、南三陸町には震災前からキリスト教の教会が建っていませんでした。震災後は、クリスチャンが集まり礼拝する場所として、津波被災地のただ中に、一つのセンターが建てられました。全国の貴い支援の賜物でした。すでに南三陸のいくつかの地域で活動していた私に、そのセンターの管理運営の責任を担うように、という声がかかりました。私はそのセンターを「クリス

チャンセンター南三陸 愛・信望館」と名付けました。支援の拠点として、このセンターは、大きな働きを担いました。

このセンターで、毎週日曜日、礼拝をささげたいという仲間の声が上がります。私は消極的でしたが開催することになりました。消極的というのはセンターが教会としてではなく、クリスチャンが祈り心を持って支援活動をするという位置付けをしていたからです。さらに、その様に一緒に礼拝をしてきたボランティアの中から、一つの提案がなされます。それは、ある教会の代表の方からの提案でした。その提案は「クリスチャンのボランティアだけではなく、地域住民を積極的に誘い、たくさんの人を集めることも、礼拝の目的にしたい、そのために中澤先生を支援したい」というものでした。「そのためには、中澤先生が関係している人たちの情報を、できるだけ全て、教えてほしい」というご要請でした。たくさん悩み、祈りました。それは、ここで私がしてきた事柄を台無しにすることになるかもしれない。それで、その方に私は「それは出来ません」と、お答えしました。すると、その方の教会のボランティアは、センターでの支援活動から撤退して行かれました。

実際のところ、当初は、被災地住民の方々が数名礼拝に参加されること



はじめに

がありました。日にちが経つにつれて、その人数も減少していったのです。地域の皆さんの間には「宗教的儀礼に関しては触れない」という態度がはっきりと見えました。さらに、このセンターを利用する被災者の方々の間に、何か目に見えない境界線のようなものが生まれ始めました。それは「このセンターがあるから生まれた分断」でした。つまり、「このセンターは、津波で家が流された方々が利用するものだ」という誤解が生まれ、その誤解は「家が流されていない人たちは、このセンターを利用できないのだ」という誤解に発展した結果、被災者の中に分断が生まれてしまったのです。私たちは心を痛めました。私たちの活動範囲にも限界が見え始めたことでした。

そうした中で、センターの土地を所有している方が復興事業を始めることになり、私たちはセンターをその地主の方に明け渡す決断をしました。「センターに来てもらう」という活動から、発災当初の「地域の中でかわりを深める」活動へと、戻すことを決断したのです。そして、センターは2014年に終了しました。

その後、感謝なことに、仮設住宅に併設する集会所や、津波の被害から免れた高台地域に建つ集会所など、地域にある施設を拠点として活動してほしいとの提案を、地域の方々から受け、そして現在に至るまで活動が続いています。「建物としての教会」がなく、「センター」がなくなつて、いよいよ活動は永続化したのだと思ひ、感謝を深めています。地域の方々との信頼関係こそ、宣教活動の基盤なのだ、私たちは学びました。

4 今の宣教・伝道からの転換

被災後に東北太平洋岸で展開したキリスト教の良い働きは、今でも地元住民に理解されています。同時に、宗教的儀礼に関しては、参加は控えめなのですが、しかし確かに、住民のみなさまが祈り心を合わせてくださいます。これだけでも、大きな成果なのです。逆に言えば、今までの伝道理念は何だったのか、と考えさせられます。とりわけ、その「今までの伝道理念」に慣れ親しんできた自分の心には、ある種のジレンマが重くのしかかるのです。

日本の土壌における宣教とは何か・伝道とは何か。私は問い続けています。ただ一つのこととは言え、と思います。それは「選択を迫り、その結果次第で、その人との関係を切るかもしれない」という「今までの伝道・宣教」とは違う何かを探さなければ、ということ。私は今も、自問し続けます。

自問自答する中で、いつも、聖書の言葉が思い出されています。

いたんだ葦を折ることもなく、

くすぶる燈心を消すこともなく、

まことをもって公義をもたらす。(旧約聖書イザヤ書42章3節)

祈りの心を持ちながら現地に住む方々と関係を育むことは、聖霊がその方々の内で働く大切な手段です。人生の悩みや出来事について疑問を感じた時には、私たちに相談していただけるようにしています。毎回、幸いな言葉・祝福の言葉を送り、一つひとつの尊いことを伝えることで、福音を伝えていきます。これは時間がかかることです。しかし、これこそが地域全体に広がる唯一の方法だと、私たちは確信しているのです。

今、こうした取り組みを互いに推奨し合うクリスチャンが集う場が「実践宣証会議」となっています。この会議で、私たちは話し合いを続けています。ぴったり同じ志を持つ人も、そこに参加していませんが、しかし、時に、全くかみ合わない議論もありました。

たとえば、ある宣教師が「結局、宣教もひとつの政治なのだ。だから、誠実にばかりしてはられない。だから、私たちの協働は難しいのだ（だから、努力して話し合おう）」と話しされたことを、とても印象的に覚えています。このお話を聞いた瞬間、私たちの会議が大事にしてきた「ひとりの人をみんなで天国に」というスローガンが壊れたような、そんなショックを感じたのでした。

あるいは、もっと生々しく難しい出来事もありました。

震災から13年が経ち、被災後の日常が東北の三陸地域にも積み重なりました。そうした中で、南三陸町にも「教会」が建つようになり、支援活動の中で知り合った方の中から、そうした「新しい教

会」に通う方も現れました。そして当然、その方からは、感謝なことに、うれしい報告や、あるいは困りごとの相談など、引き続き電話での連絡が私のところに入り続けます。私は、その方が通うようになった「新しい教会」の牧師にも相談するように勧めます。それでもやはり、どこの地域にもある微妙で繊細な問題が起こり始めるのです。つまり「他の教会のメンバーからの相談」を、私が受けることになるのです。

私は牧師ですから、当然、守秘義務を守りながらの対応になります。その内、私が相談を受けていることを知った当該の牧師から電話がかかってきました。「自分が知らないところで、相談を受けていたことは、悲しい」と責められました。そして「今後は、私の教会のメンバーから電話がかかってきても、一切、出ないでほしい」と要請され、「以前から続いていた関係も、断つべきだ。それが当然だし、大切なことだ」と強くおっしゃるのです。

私は、果たしてどう考えたらよいのか、途方にくれました。もちろん「信徒を横取りする」ようなことがあってはいけません。ですが、人はそれぞれ、自分で考えて人間関係を育むべきです。そうしたことは、どこまでも自由であるはずで、では、どうすればよいのでしょうか。

私はこのことを、「実践宣証会議」で話し合い、分かち合いました。こうして人と人の関係を引き裂くものが、私たちの「天国」なのだろうか。私たちは、真剣に話し合ったのです。いったい、私たちの「天国観」とは何なのでしょう。

はじめに

同じ被災地で、同じ経験をし、大切な気付きを得て始まった「実践宣証会議」でした。しかし、時間が経つにつれて、その継続には難しさが生まれています。そのことを強く感じさせる出来事が、いくつも起こります。その度に、共に悩み、共に語り合い、励まし合って祈りあう。そういう仲間がいます。これは神さまの恵みだと思えます。しかし、その上で、やはり、私の悩みは募るばかりでした。

5 FEBECからの呼びかけ——「今の宣教・伝道」

そうした「難しさ」に直面しながら、私は、私自身の中で培われた神学教育・私自身が養われたキリスト教精神の枠組みの中で、ずっと「宣教とは何か」「伝道とは何か」と問い続けました。どうしても、一人では整理がつきませんでした。ある時、そのことを川上直哉さんに話した時、「それは、ちょうどよかった」とばかり、デイヴィット・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』という本の読書会を考えていると、嬉しそうに（！）お話しくださったのです。聞くと、他にも学びたいと考えていた方々がいるというではありませんか。こうしてまず4人の被災地の牧師が集まり、学びが始まりました。

最初の回は、津波被災地の福祉施設の会議室をお借りして、4人が集まって読書会をしました。この施設は、たくさんのキリスト教団体と、そして仏教等、様々な支援団体の支援によって設立されたものでした。その施設こそ、「おひとり」の被災者の、地域を愛する熱い想いに、多くの支援が結集した大切な現場でした。その施設の設立の経緯はこうです——2011年、地域に生きる「障がい

児」たちとその親たちが、何人も、避難所から追い出された。その現実にはショックを受け、これではいけないと一念発起した「おひとり」の方がいた。その「おひとり」の方の思いに、宗教の垣根を越えて、支援が結集した。そうして震災後に新しく立ち上げられた精神障がい児者施設が、デイヴィット・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』の読書会の最初の会場となったのです。クリスチャンではないその施設長は、私たちの企画を喜び、喜んで会場を貸してください、さらに、読書会に最初から最後まで同席して、私たちの語り合いに耳を傾けてくださいました。それは、忘れられない第一回の読書会でした。

そしてすぐ、「コロナ」の騒動になりました。福祉施設に集まることは、とても難しくなりました。それで、オンラインで、読書会を続けました。すると、その困難を奇貨として、広く参加者を募り、全国からいつも多くの参加者を得ることになりました。その様々な参加者は、それぞれの現場を持っていました。その現場が、この読書会で共有されることになりました。参加する皆さんは、やはり「今の宣教・伝道」ではいけない、という思いをお持ちになりました。

こうして展開したインターネットにおける学びに、キリスト教放送局FEBBC放送の長倉崇宣さんが注目し、ラジオ番組に仕立て上げてくださいました。長倉さんは、私たちの読書会の録画をYoutubeで見てくださいだったので（その録画は、今でも見ることが出来ます。「宣教論読書会」と検索くだされば、きっと、見つかると思います）。番組の中で長倉さんは、川上さんにこの読書会について質問し、「今の

はじめに

「宣教・伝道」について率直に疑問を投げかけ、深い所へとの的を射抜くような問を立てて、川上さんとの素晴らしい対話を組み立てていただきました。

さらに、このラジオ番組を聞いたおひとりの牧師が、強い感動を覚え、文字起こしを始められました。その文字起こしを牧師仲間を読んでもらうために、彼はひとりで作業を始めたのでした。その牧師さんは、福島県で小さな教会・伝道所を大切に牧会している方で、川上さんとも親しい方でした。それで、文字起こしは、川上さんのところへも届きました。

そうして、この本が出版されることになりました。

校正原稿を頂き、私は先に拝読させて頂きました。東日本大震災で起きたことも振り返りながら読むと、独特の感想が浮かんできます。——歴史を通じて「支配」が知らず知らずのうちに教会に浸透していること。各時代には先行する思想があり、それが「宣教」の中にも植え付けられてしまっていること。そうして、教会はいつも、同じ悩みに直面していたこと。こうしたことに、はっと気付かされる優れた本——これが私の感想です。

本書と共に、デイヴィット・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』を併せてお読みくださることを、心からお勧めします。

二〇二四年七月

私の救い、私たちの希望

—— ボッシュ 『宣教のパラダイム転換』を被災の地で読む

目次

はじめに 中澤竜生 3

私の救い、私たちの希望 (第1回) 宮城石巻読書の集い

パラダイムを貫く共振 20

私の救い、私たちの希望 (第2回) 宮城石巻読書の集い

教会の外にいる人の言葉で、福音を語りなおす 52

私の救い、私たちの希望 (第3回) 宮城石巻読書の集い

「神は、偏在する」。東北で聖書を読むことの意味 88

私の救い、私たちの希望 (第4回) 宮城石巻読書の集い

なぜ私たちは宣教するのか、礼拝に生きるのか 120

私の救い、私たちの希望 (第5回) 宮城石巻読書の集い

東北キリシタンの成功そして消滅の姿から 152

私の救い、私たちの希望（第6回） 宮城石巻読書の集い

現場から聖書を読み、宣教を見つめる。

184

「東北ヘルプ」掲載記事から

釜石から——「街の牧師」として…高橋夫妻インタビュー

218

「東北ヘルプ」掲載記事から

「街の牧師」の可能性——釜石と熊本から

237

おわりに 川上直哉

253

【書評再録】P・T・フォーサイス 川上直哉「訳著」

活けるキリスト——『活けるキリスト』の現代的意味

不器用な人びと……………大頭眞一氏

巻末

私の救い、私たちの希望（第1回） 宮城石巻読書の集い

パラダイムを貫く共振

東日本大震災で被災した宮城県石巻市。この地に1人の牧師の問いかけをきっかけに、ある読書会が始まりました。宣教ってなんだろう。何をいまさらと言われるかもしれないこの問いを、もう一度私の救いから見つめ直す。——（日本FEBEC統括ディレクター補佐長倉崇宣）

第1回 パラダイムを貫く共振

読書会について

長倉崇宣（以下長倉） 今回先生にお時間をいただいて、日本での宣教、教会の宣教って何だろうかということ、先生に置かれている現場で見えてらっしゃること、見つけてらっしゃることを私たちが考える一つの大事なヒントにさせていただきたいと思って、先生にお声掛けさせていただ

きました。

先生は石巻栄光教会で講座や読書会をなさり、オンライン配信されています。私もYouTubeで読書会の様子を拝見しまして、この企画を立てたことでした。特に、デイヴィッド・ボッシュ著『宣教のパラダイム転換』（東京ミッション研究所訳、発行、2004年）の読書会が、とても刺激的だったのです。これは上下巻からなる分厚い本ですね。この本を先生が教会の読書会で読んでらっしゃる。この『宣教のパラダイム転換』という本について、ちょっと調べてみました。宣教学の本である、しかも、その分野では「ニュークラシック」であると帯文にも書いてあるものでした。読書会でこの本を読むことになった経緯から、お伺いしたいと思います。

川上直哉（以下川上）

二つのことが、ちょうど重なった格好だったので。

まず、被災地における支援活動の「持続可能性」の問題がありました。震災があって、いろいろなことが現場で行われ、いろいろな人たちが協力していました。しかし、震災から5年ぐらい経った頃「この繋がりがって、持続可能だろうか」ということが、だんだん問題になってきました。切ないことですね。でも、「お金」の問題があるのです。被災地での支援の取り組みを続けようと思うのに、最初はふんだんに寄せられた募金も、そのうち来なくなる。その時に「どうやって持続可能性を確保するか」と、皆考え始める。そして、いくつかの団体は「教会を建てて・クリスチャンを増やして・そこで献金を集めて、持続可能にしよう」と思うようになったのです。それは、そ

れで、気持ちはわかるのです。けれど、被災地の人びと・支援される側からすると、それは「裏切られた」という気にもなるでしょう。その時、「宣教」ということについて、根本的に考え直させられることになったのです。いったい自分たちは、「宣教」という事柄について、何を知っているのだろうか。そのことを、一緒に活動した仲間と一緒に考える。今のうちなら、そうした可能性も、あるんじゃないかと考えました。現場で一緒に働いた。それぞれバックグラウンドは別なのだけれど、それぞれ現場で磨かれた。そうした仲間意識を持っている今は、一緒に考えるチャンスじゃないか。そんなことを思っ、この読書会を始めたのが一つです。

そしてもう一つは、日本基督教団東北教区宮城北地区牧師会でなされた、ひとつの問題提起でした。上記のような「持続可能性」の問題が意識されたちようど同じころのことです。定例で行われている牧師会で、日本基督教団鳴子教会気仙沼集会の小野寺清栄牧師が、「宣教って何ですか」と、真正面から、みんなに問うたのでした。しかし、その場では、誰もはっきりした答えを出すことができなかったように思います。あるいは、いくつかの応答もあったのですが、小野寺先生は満足しなかった。そのことが、とても気になっていました。

この二つのことが重なるようにして、この読書会は始まったのでした。それが重なったのは、「実践宣証会議」という場でした。「宣教」ということを、「証^{あかし}」という視角からとらえ直そうという会議を、支援仲間の中澤竜生牧師が主宰されていたのです。そこに私も参加させていただき、そ

の参加者と一緒に議論する中で、この二つの事柄が重なってきたのでした。

所謂「福音派」も、そして「日本基督教団」も、みんなと一緒に「宣教」を考えることができないか、と考えた時、このデイヴィッド・ボッシュの本を思い出したのです。この本は「超教派」でチームを組んで日本語への翻訳がなされたものでした。そのことを、思い出したのです。

そのうち「コロナ」の騒動になりました。読書会は「オンライン」になりました。すると、「ボッシュなら読みたい」とおっしゃる方が、全国から、何人も参加くださいました。それぞれが現場で一所懸命いろいろなことをなさっておられる方でした。それで、まず自己紹介をして「自分にとって宣教って何だろう」っていうことを、それこそ忌憚なく、議論していただきました。「聖書は神の言葉だと決めつけるから、教会にハラスメントがこんな蔓延している」と本気になって憂慮している方。「いや聖書はやっぱり神の言葉で、それ以外、自分たちにはありえない」というような方もいる。それぞれ、遠慮しないで喋ってもらおう。そんな会がずっと続いています。

結局、みなさん「このままじゃいけない」と思っている。だから、活発に議論なさるのだ、という気がします。

問題意識の正体

長倉 「このままじゃいけない」ということを、濃淡はあれ、感じている人は多いと思います。